第325号　昭和47年7月10日発行（毎月10日発行）
定価一部 100円

昭和47年（1972年）
7月号（No. 325）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

平ヶ岳瞥見記……武田久吉… 1
武田久吉博士のことども
……藤島敏男… 9
上高地山岳研究所……林　和夫… 2
山と蝶のものがたり②…春田俊郎… 3
集会担当所感……神崎忠男… 3
『ヒマラヤ』
著者の立場……白川義員… 3
雪上での制動確保
について……松永敏郎… 4
ヒマラヤ，カラコルム，
ヒンズー・クシュ…吉沢一郎… 6
高所登山技術考 1……村井　葵… 7
図書紹介『雪の科学』…五十嵐高志… 7
雪の高森山……名児耶達男… 8
会務報告（集会他）……10
新入会員，住所変更…… 10,11

平ヶ岳瞥見記（遺稿）

山上の水蘚湿原未来記

武田久吉

新潟県北魚沼郡湯之谷村は、東隣の南会津郡の桧枝岐村に伯仲する程の広さで、村内には聚落の数も少くて、高山大岳が犇き合っている。その中でも群馬県利根郡に境する平ヶ岳は、魚沼三山を圧して高いが、その名の示す通り、大体平調の山であるから、峭峻の文字を以て形容するに足りない。

この山には登山道が無かったので、山岳会発起人の一人である高頭義明君は、数年に亘るその地理や登路の研究の末、大正四年七月に、千辛万苦の後銀山平から、只見川の上流の赤川に注ぐ白沢を遡行して、頂上に達した。これが山岳人がこの山に足跡を印した最初である。

数年前、銀山平から上下の、大倉山の尾根を経由して池ノ岳に達する路が伐り拓かれ、山麓から七、八時間の苦闘によって池ノ岳の野営地に達することが出来るというが、池ノ岳まで来ればあとは一投足で平ヶ岳の頂上を踏むことが可能である。従って意外な登山者も現れて、三角点の付近は、彼等の運び上げた塵芥が堆積して、清浄たるべき最高点を汚して居て、情ない状景を呈している。

高頭君の登山記事は、『山岳』第十年（大正五年）には詳かであるが、第二の記事は、大正九年七月に、利根川の右岸の山脈を縦走して水源地の大水上山に達し、引き続いて左岸の山脈を辿り、遂に尾瀬ヶ原の西端に達し、更に至仏山に登り、笠科山の手前から西流する〈這摺〉沢（五万分一図の愉快な当字の平弦沢）を下って藤原に出た木暮、藤島の両君が、途中平ヶ岳に登った折の記文（『山岳』第十六年奥上州号）に詳記してある。その一部を抄出すると「三角点の東から北へかけては主として二十尺前後の白桧（とあるのはオオシラビソ）の森林であって、西から南へかけては岩鏡、岩銀杏（銀杏は種子の名であって、木の名は葉の形から起った鴨脚の支那宋代の発音からイチョウと変化したもの）を主とした草原である。森林には下生へに偃松と笹とクロウスゴが繁ってゐるし、草原には小梅慶草（慶は当らず蕙字を用うべきもの）や日光黄菅、珍車（誰しもこう当字したくなるが、実は稚児車の転化である）が散生している外、一団をなした偃松が途切れ〳〵に縁辺を囲んでゐる。三角点の附近には沢山の小さな池が巧に按排されて、自然の庭園をなしている。其中で南に在るものは稍大きく、水も飲料に差支ない程に澄んでゐる。池の囲りには小岩鏡、御前橋、石楠、姫石楠、アカモノ、珍車、岩高蘭、立山竜胆、蔓苔桃、麒麟草、猩々袴、鷺菅などがあり、殊に毛氈苔と白山小桜が美しい。此の辺は一体に水苔の床であるらしく、二尺近く掘っても、土は出なかった」とある。

私は平ヶ岳を尾瀬の三平峠、燧ヶ岳から、這摺山、さては大白沢山あたりから屢々望見して、その堂々たる威風に憧憬を禁じ得なかったが、おいそれと雑作なく行かれる所ではないし仮令小出まで急行なら四時間以内で達せられるにせよ、それから銀山平まで相当な時間と労力が要求されるし、殊に最後の登攀となると、私の如き老体にとっては中々容易な業ではない、その上、天幕内の仮泊は余り快適なものではないので、どうしても、踌躇勝ちになる。それを悄然と見て取った山友達が燧ヶ岳の北裏の御池まで行けば、そこから尾瀬の各山小屋へ荷を運ぶヘリコプターが往来するのを見てヒントを得、それを旨く利用して、平ヶ岳の頂上まで運んで貰えば何の苦もなく往復出来ることに着目し、献立て全部を手際よく調えてくれた。あとは天候だけの問題である。本年（昭和四十六年・編者注）七月の中旬、東京を寝台列車でたち、翌早朝会津若松に到着、それから自動車で桧枝岐へ、途中駒止湿原を踏査という申し分ない寸法。往還に小池さえ出来ている猛烈な降雨の中を難なく乗り切って、夕刻前には久しぶりで変貌した桧枝岐に安着。翌日は幾年振りかで、この村内を徘徊して、曾て見落した箇所を訪ねるやら、旧知の人達に面会して旧交を温めるやら、これに加え未知の湿原を探って、思いがけない植物にめぐり会ったりして、晴雨相半ばする天気を気にしながらも、楽しい両三日を送ってから、いよいよ二十日には御池ロッヂに引移り、ヘリコプターの来着を待ったが、その日の午後にはヘリも来着して荷物の運搬を開始した。そこで翌日の打ち合せが恙なく行なわれて、いよいよ久恋の平ヶ岳の頂上に乗り込める見込みが立つに至った。二十一日終日一滴の雨も落ちない。午前九時すぎ、ヘリの手透きを幸い、乗せて貰って、十五分以内で、平ヶ嶽の三角点付近に着陸してくれてこちらは大助かり。達者な人達は池ノ岳目ざして走り去った。私はその途中あたりまで、山上を歩き廻って、景色を賞すると共に、気になるのは草木である。殊に花満開のケナシハクサンシャクナゲや、雌雄の花を着けたハイマツなどが見当ると、これを見逃すことは出来ない。木暮君の記す通り、所々にオオシラビソやコメツガの樹叢があり、ハイマツとハクサンシャクナゲ（ケナシとウラゲと）が混生していたが、往々ネズコの姿も見受けた。然し濶葉樹の種類は尾瀬の菖蒲平（あやめだいら）に劣る。私の歩きまわった区域内では、土は見当らずして土のように見えてもそれは泥炭とまで変化はしていないが、北海道でいう泥炭地と選ばないように思われる。諸方の高山で見るところによると、中腹の針葉樹林内にあるミズゴケの小区域は弱い光線しかささない林内に侵入したものではなくて、針葉樹林が成立する以前から存在した大集団の一部分が残存せるもので、太古においては、現在高山中腹に見る針葉樹林は、本来ミズゴケの大きな湿原であったろう、それが永い間に、針葉樹林に変化したものと考えられる。この説を疑う人は白馬大池から栂池ヒュッテに下る途中の天狗原湿原を、もしくは栂池小屋の少し下の神の田圃を丹念に調査すれば、如何にもと肯くことが出来よう。この考を推し進めれば、菖蒲平も幾百年の後には針葉樹林に変るであろうし、平ヶ岳の頂上一帯も遂には針葉樹林に蔽われるに相違ないと、予言するに踌躇しない。残念ながらその時期まで生き永らえて、それ見ろと言えないのが心残りである。

序に言う、私達が今平ヶ岳と呼ぶ山は、土地の人達が平（ひら）岳と称するのを、登攀記発表の前後に高頭君が、平ヶ岳と改称したものだと、同君自身から耳にしたことを、付記して置く。

〈編者付記〉

本稿は武田博士が本年六月十日六義園の有志閑談会に出席するのをたのしみにしておられ、席上朗読するとて、発病の直前に執筆脱稿されたものであるが、たまたま急逝されたために遺稿となった。閑談会の席上、近藤信行氏が代読し参会者一同深い感銘をうけた。

博士の植物と山に対する探求心と愛情とが、最後までかわらなかったことの窺われる一文である。

《建築資金の募金開始》

日本山岳会上高地山岳研究所（山荘の正式名称）新築

会員諸氏の強力な御力添えを望みます

山岳研究所委員会　林　和夫

穂高の岩と氷の壁が見えかくれする森の中に、小さいがっちりした山小舎が得られたらどんなに素晴しいかという望みは、多くの会員が持っておられることと思います。

山に入る前の一時をここで過してから元気に出発したり、山旅を終えて疲れた身体をゆっくり休める拠所となる。

また古い会員は、夫人や子供を同伴で、若い日日活躍した峰々を見上げながら岳沢の中程まで、あるいは徳沢のあたりを散策し、静な数日を過す。また各支部から選ばれた若者が、練達したリーダーにしたがって基礎技術を身につける講習会の本拠となる。さらに海外からのお客があったとき自分等の小舎としていささかの誇りをもって御案内し休んでいただく。

そのような山小舎が出来れば、日本山岳会に入会する魅力も増すことでしょうし、また現在の会員が力をあわせてこの小舎を残して置けば、後代の会員に対するよき遺産となるでしょう。

こういう希望はあっても国立公園の中にそれを実現することは容易でありません。その第一歩が実現したのは、昭和三十七年、槇さんはじめ当時の理事諸氏と、高山さんその他の地元の皆さんのお努力により、上高地の案内人組合の家を肩代りして買い取ったことにはじまります。これがなければ今回の建築は実現しなかったもので、当時の関係者のお骨折に対しては深く感謝する次第であります。しかし小舎そのものは、平地にあった民家をそのまま移築した平屋であるのでいかにも使いにくく、また風雪のためひどく破損してしまい、現在では荒れるにまかせて使用中止している状態であります。

透視図

従来もなんとかこれを建て直そうと色々な方から種々の計画が出されましたが、ようやく昭和四十六年の山荘委員会の委員が力を併せてこれが実現にこぎつけたものであります。

即ち、現地に行って建物の構想を練ったり、地元の意向打診と協力の要請をする、関係官庁の内意を調べてどういう計画にすれば許可が得易いか調査する、日本自転車振興会に対し助成金交付の下交渉をするなど、やることはたくさんありました。特に日本の自然を護ろうとの気運が澎湃として起り、大石長官のひきいる環境庁の発言が俄然強くなったのは大いに喜ばしいことですが、それに伴い「国立公園内に山小舎を建てることなどおいそれとは許可出来ない。日本山岳会あたりはそれに最も協力してくれる立場」と言う意向のお役所を説得するのは容易なことでありませんでした。計画も何回か変更圧縮して、結局現在の大きさ（約二十坪）に二階を増した程度の三十坪にとどめる、また前記のような講習会に使うことなどを条件としてようやく先般、環境庁、文化庁、松本営林署などの正式増改築許可を得られたものです（そのために、呼び名も上高地山岳研究所といういかめしいものになったわけです）。また日本自転車振興会の方も計画の規模が小さいのに対しては、特別とも思える四百四十万円の補助金交付の内諾をとりつけ、実施にふみ切る大きな力づけとなりました。この間にあって、山崎、村山、今井田、高山氏をはじめとして各委員の努力の大きかったことをあらためて特記し感謝するものであります。

構　想

①建築場所

バス発着所から河童橋まで歩き、橋を渡ったら右に岳沢方面に入る道をとり、約二百mほど行った左手の森の中に建ちます。前面の梓川越し、樹の間がくれに、明神、前穂高、奥穂高がそそり立ち、ちょっと離れただけで河童橋付近のにぎやかな音もきこえず、誠に静かな環境であります。

②設計者　山本学治氏（東京芸大教授）

建築学上も種々の業績のある方ですが、山が好きで、いくつかの山小舎の設計を手がけておられます。芸大ヒュッテ（後立山）、朋文堂ヒュッテ（穂高涸沢）、川村小舎（志賀高原熊ノ湯うら）等。「山でうたう唄」（理論社刊）の著者でもあります。

③構造（上・下図参照）

鉄筋コンクリートを基礎構造とし、これに木材を多く組み合せて風格のあるものとした、がっちりした建物です。暖房と風呂は石油集中方式であり、別にたのしむために薪ストーブをつける予定です。炊事はプロパンガス使用。またトイレは浄化槽を設け、水洗式とします。

④建設進行予定

六月中旬設計完了、引続き関係官庁許可取得、業者入札等。七月はじめ着工――十月末完工予定と、かなり忙しい日程になりそうです。

⑤将来の使い方案

実際のオープンは四十八年春ですからそれまでに使い方明細をきめますが一応次のような構想に基いて設計されています。

(A)オープン期間　春先から冬前までとし、冬期はクローズ（防火その他の見地から）。

(B)管理人　右の期間は常任。また夏の最盛期はアルバイト一名をおく。

(C)食事　自炊方式。但しプロパン炊事具をたくさん置き、また米、味噌、砂糖、缶詰等は全て売店コーナーで売ります。これにより、高い宿賃で不味いものを食べさせられる心配がなく（肉その他を持参する）、管理人が探し易くなり、また炊事場について保健所の監督を受けなくてすむ（営業用でないので）等の利点があります。

(D)宿泊料（予定）

会員（約八百円）、会員外（約千円）

(E)宿泊申込み

会員優先とし、あきがあればゲストも歓迎。（ただしゲストは必ず会員の紹介を必要とする）申込み先は、本会、信濃支部、小舎等。

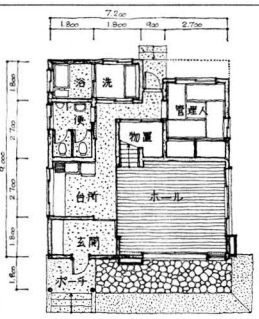
(F)年間管理費　一ヵ年の管理費に百二十万円が予想されますが、これは宿泊費収入でまかなって、本部会計には負担をかけないようにと考えております。（ただし第一年、第二年目は若干の赤字が予想されます）

募金計画

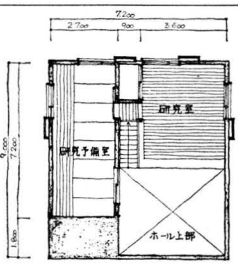
支出予算

・建築費　四百八十九万円

・暖房設備費　六十万円



1階平面図



2階平面図

・浄化槽設備費　三十三万円
・初年度調弁費　三百万円
・事務費、募金
・その他予備費　百十八万円
合計　一千万円

収入予算
・日本自転車振興会よりの補助金　四百四十万円
・会員よりの寄付金　五百万円
・外部よりの寄付金　六十万円
合計　一千万円

募金種類

①一口　三千円　学生会員や若い会員が一口でも多く寄付して下さるようにと設けた枠です。

②一口　五千円
③一口　一万円
④一万円以上

一般の会員にはできるだけ②③④のいずれかでお願いします。

払込

なるべく一時に払い込んで頂けば有難いのですが、都会により分割払いでも結構です。

申込み

あらためて用紙を別送します。それに氏名、金額、お支払い方法を記入してお送り下さい。

払込締切

昭和四十八年三月まで

割引宿泊券の贈呈

寄付して下さった方に対し、感謝の印に二百円割引宿泊券(二ヵ年間有効)を次の割合で贈呈します。三千円―一枚、五千円―二枚。一万円―四枚及びJ・A・Cマーク入りペーパーナイフ(それ以上は右に準じる)

右の如き要領で募金を開始します。現在会報を送っている会員が約二千五百名、四十六年度会費を払込んで下さった会員が約二千二百名あります。この中で何名の方が平均何円を寄付して下さるか、それを大いに気にしております。会員諸氏の御協力御力添えを切に望みます。

集会担当所感

神崎忠男

一年間集会を担当して、会員の皆様とはなしをしてみると、会に対する不平不満や新入会員がとまどう面が意外に多いことに気づきました。会員からの意見発表の場をもつことや、会のあり方、登山のあり方について倫理的にほりさげて討論する場をつくることを真剣に考えています。会員諸氏からの自発的な意欲を大いに期待します。J・A・Cの発展と、より楽しい山登りに役立てたい、これが集会係全員の願いです。

山と蝶のものがたり 2

――日本山岳会への道――

春田俊郎

ウエストンの名著〝日本アルプスの探検と登山〟が発刊されたのは明治二十九年であるが、これが偶然に岡野金次郎の目に触れたのは明治三十五年であった。したがって博物学同志会の会員として活躍していた二十歳前後の人達は、日本アルプスの名前も存在も知らなかったし、人伝てに聞いても、とても採集に行けるような場所でなかった。事実、その頃既に日本アルプスに足を踏み入れていた日本人は岡野のほか、小島久太、高頭仁兵衛らのごく限られた人達だけであって、博物学同志会のメンバーの最高目標は八ヶ岳であった。

八ヶ岳は長野師範教諭(後に校長)矢沢米三郎が明治三十年八月に植物採集に訪れ、城数馬が三十四年九月と三十五年七月に夏沢峠から硫黄岳、横岳にかけて植物を採集し、ツクモグサ、ウルップソウ、ミヤマツメクサ、クモマナズナを発見し、そのほか早田文蔵らの採集もあり、日本では早くから高山植物の調査の行われた山である。

明治三十六年七月に、武田久吉、河田黙の両名によって、小海から稲子、本沢温泉を経て赤岳までの往復の採集登山がなされ、さらにその年の八月、武田が単身、甲斐駒ヶ岳に植物採集をしながら登り、前者は河田によって「博物の友」に三回に分けて〝八ヶ岳採集記〟として発表され、登山界からも注目されるようになった。

博物学同志会のなかで、登山と高山植物に関しては、武田、河田の活躍が目覚ましく群を抜いていたが、昆虫の研究者も数が多かった。その中でも、蝶については三宅恒方が東大理学部ですでに専門家になっていたし、高野鷹蔵は自分で各地を採集して歩くほか、沖縄、台湾の蝶まで手に入れ、明治三十六、七年頃に日本でも屈指の標本を所有していた。矢野宗幹、梅沢親光も蝶を中心とする昆虫の愛好者で「博物の友」の常連執筆者であり、特に矢野は毒舌でも知られていた。市河三喜は蝶、甲虫に熱心で、同級の小熊桿とともに将来昆虫学者を目指して山野を駈け廻っていたが、あまり熱心に過ぎて極度の近視となり、明治三十六年に府立一中を卒業する時には、昆虫学者を諦らめ、英文学を志すようになった。しかしそれでも博物愛好と山岳探究は止み難く、明治三十八年の夏には朝鮮済州島に四十日間も昆虫採集に出かけたほどであった。鳥山悌成は特に専門はなかったが博物学同志会にはなくてはならぬ存在で、「博物の友」の厄介な編集を一人で十年近くも引き受け、会計の村松茂、その弟の村松操(後の東条操)とともに重宝がられていた。

武田、山川、高野、梅沢、矢野、市河らの博物学同志会のメンバーが、もっぱら山岳地帯で植物、昆虫の採集を行うようになると、「博物の友」の原稿も博物の雑誌なのか、山の雑誌なのか判らないほど登山の記事が多くなり、中には登山の方が面白くなって採集研究を止めてしまう会員もでてきた。

また武田は山草会の例会や日光の植物採集を通じて城数馬と識るようになり、明治三十六年五月には城の山草陳列会に河田とともに参加し、山岳会の設立ということも考えるようになってきた。

一方、最初にウエストンの著書を見た岡野金次郎は、親友の小島久太とともにこの外人登山家の足跡と写真にびっくりし、ウエストンと会談の機会を待っていたが、明治三十七年に横浜でウエストンの講演会が開かれた際、二人はついに面会することができた。ウエストンは岡野、小島に対し、いろいろ山の話をした後日本でも山岳会をつくるべきだとの提言をし、さらに英国のアルパイン・クラブに連絡の労をとった。岡野、小島らは大いに意を強くし、日本に山岳会を設立すべく計画をたてたが数名のメンバーではどうにもならなかった。しかし、小島が明治三十七年三月号の〝太陽〟という雑誌に書いた〝甲斐の白峰〟という文が、博物学同志会の山好きの若者の眼にとまり、それが契機となって山岳会への道が開かれて行くのである。

(文中敬称略)

『ヒマラヤ』著者の立場

白川義員

本誌5月号の「図書紹介」欄に、小生の作品集「ヒマラヤ/小学館刊」を吉沢一郎氏が紹介して下さった。

紹介の労をとられた氏のご好意に感謝し、指摘された点が確かな誤りなら当然訂正しなければならない。

ただ、吉沢氏の文章には読者の誤解を招き易い表現があり、これを放置することは、作品集『ヒマラヤ』に授賞した毎日芸術賞・芸術選奨文部大臣賞の二賞の権威と、その選考委員の方々の名誉を著しく傷つけ、また著書の信頼性の問題にも関連する事なので、敢えて著者の立場からの発言を求めた次第である。

問題は二点に絞られる。その①は〝地図にも**解説**にも納得のいかない点がいくつも**ある**〟という表現である。

地図については問題の②と関連するので後に回し、まず〝解説〟の文章の内容について述べると、特別寄稿のA・トインビー、E・ヒラリー氏の原稿以外の全ては、私が四年間の取材体験を記録に基づいて書き、巻末の「ヒマラヤ概説」は深田久弥氏の遺稿となったものである。

吉沢氏のいわれる納得のいかない部分の詳細は不明であるが、少なくとも私の紀行文に関しては、その巧拙は別として、内容的には確たる自信がある。しかも紀行文であって問題になる部分はほとんどない。

とすると、問題があるのは深田氏の原稿という事になるが、深田氏が故人となられた現在、如何とも致し難いことである。これは決して故人への責任転稼ではない。むしろ反論不可能な故人の立場を明らかにするためにも、そ

の間の経緯をどうしても説明しなくてはならない。

深田久弥氏が四百字詰五十九枚の「ヒマラヤ概説」の執筆に要した期間は丁度六ヵ月、かの「九山山房」の膨大な資料はもとより、常に内外の新刊図書や情報を参考に、推敲を重ねて漸く脱稿したのが四十六年三月十六日、氏が茅ケ岳で逝かれる五日前であった。なお、編集部の話によると、氏は原稿を渡すに際し、下書きを控えとして手許に残し、勝手な加筆削除をいっさい禁じられたそうである。そのため氏の逝去後に出てきたゲラ刷りは原稿対称の校正に留め、署名原稿に対する当然の礼儀として、文末に（原文のまま）のただし書きを入れて、氏の言葉に従ったのである。

これは生前、深田氏の国内というよりは世界的なヒマラヤ研究の権威としての立場、またその一端としての多くの著書と輝かしい業績の数々に敬意を表しての措置であり、従って、かりに『ヒマラヤ』を再版するにしても深田氏の稿の訂正はしないのが常識である。

あくまでも推察であるが、吉沢氏の指摘された山名・標高についての疑問の幾つかは、この（原文のまま）掲載といういきさつの中で生じたものと思われ、それを問題とするのは両氏の見解の相違というほかない。

次に、問題②の地図にふれよう。吉沢氏は〝山名・標高も大分古典的である〟といわれるが、これも明記してある通り監修・深田久弥、編図・五百沢智也、宮森常雄（ヒンズークシュ・エリア）の各氏による合作で編集の基本方針は監修者の責任において決定した。

そして、ここでもまた両氏の見解の相違ということは否めないようである。地図に対する深田氏の執念とでもいうか、とにかく一資料や一説に偏することがないよう「参考資料」として記載した各種データおよび四十五年時点での最新情報を基に作業を進める過程で、両氏のデータに相違があり、すでに問題になったのである。

ヒマラヤ地図に如何に不明の点が多いかは、私が現地に入っている期間を通して痛感した問題であり、その解明は今後に待つとして、当時としては、ヒマラヤの山名・標高に関する第一人者であった深田氏の決定に全幅の信頼をおいたのはむしろ当然であったと思う。

聞くところによれば、K2が世界第二位の高峰でカンチェンジュンガが第三位という事自体、K2だけがチベット高原から測量されているために（他は全部インド平原から）、この二位と三位の順位さえ絶対に確実とは断言できないといわれる現時点において、しかも山名や標高の最新情報・最新資料を集めあさっている現段階で、〝山名も標高も大分古典的〟という吉沢氏の発言は、氏自身でいわれているように少々〝大人気ない〟のではないか。

山名や標高の個々については、五百沢氏が目下、調査、研究中で、そのうち具体的な結果が得られると思う。

とにかく、地図は、ご指摘の点が明らかな誤りであると公的に判明した時は、もちろん訂正しなければならない。それにしても、現在の国際情勢からみて、はっきりした資料が得られるのは大分さきになろう。

第二八三回小集会

ニュージーランド山岳会副会長ノルマン・ハーディ氏を招き、ヒマラヤの話やスライドを見ながら米国のマクマナード基地へ指導にいった時のはなしを聞いた。最後にハーディ夫人のあいさつが花を添えた感じで、会員五十六名出席のもとに盛会であった。

（神崎忠男）

☆雪上での……制動確保について☆

松永敏郎

始めに引用させていただく、

制動確保（隔時登攀時）

氷雪上では、確保者の確保技術がいくら優れたものであっても、不安定な氷雪上にいる限り足場の方が衝撃に耐えられずにくずれてしまうので、確保者も共に滑落せざるを得ない。雪質にもよるが、人間一人がやっと支えられる程度の軟雪上の足場などは、ちょっとした衝撃にも耐えることはできない。氷や堅雪上の斜面では、墜落者の滑落速度が急増し、衝撃も大きい。これが氷雪上の確保を困難なものにする最大の原因である。

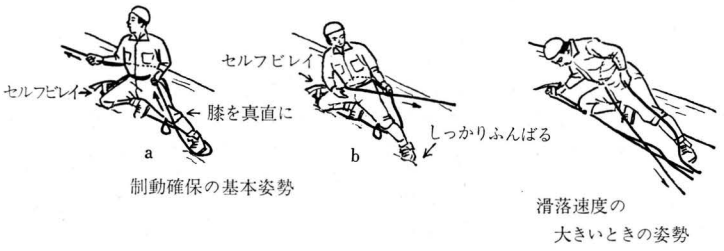
このような雪面上の確保には、ザイルは、はじめきつく握らず、足場が持応えられる範囲内の制動を綱にかけて、落下速度を徐々におそくし停止させる。この制動確保法によって、確保者も安全なまま、滑落者も大きな衝撃を受けることなく停止させることができる。〈登山指導者研修会テキスト、文部省登山研修所、昭和四十五年五月発行〉

さて、当会指導委員会が開催する例年一回の冬山技術講習会においても、雪上における制動確保の理論的な説明はほぼ左記に近似したものであり、実際の方法については、図一（同テキスト一四五ページ、図11より引用、ただし、制動確保の悪い態勢例は削除）にみられるように、

まず、確保者の山側一メートル位のところにピッケルを刺してビレイピンとし、セルフビレイする。体は最大傾斜線に平行に保つ。谷側の膝をまっすぐに伸ばし、大きな足場をつくってこれに突張る〈同テキスト〉が普通の形で、私の記憶では、すでに数年余をこえて、当講習会での制動確保の基礎練習で代表的な位置を占めていたといえると思う。

また、引用にもよるごとく、文部省登山研修所はもちろん、日本山岳協会の指導教程においても、この種の確保については、理論、方法ともに大同小異のものが行なわれていると聞いているので、いわば、確保技術の中でも、定形化した安定度の高いものと考えられているのであろうか。

第一図



制動確保の基本姿勢

滑落速度の大きいときの姿勢

（登山指導者研修会テキストより引用）

私がこの確保法に対して疑問を抱いたのは、まず第一に、私自身の積雪期の登山に、ただ一度も、この姿勢での確保法を行なった経験がなかったことからである。もちろん、個人的に、雪上確保を必要とする登攀経験が少いのもその因の一つであろうと思うので、この確保法を解説したり、実技を指導された立場の方々が、実際の積雪期登攀時、この形の確保を、どこで、何回経験されているかをお聞きしたいのである。

第二には、この確保法を練習する受講者の失敗例が予想以上に多いということである。当然、これらの多くは、確保法の制動そのものについての理解が不足か、もしくは、初心の恐怖感による操作の不良がその原因であろうが特に注目すべきことは、確保者に加わる滑落衝撃の方向に対しての姿勢で、力に対しての足の位置を正しくおくことができず、きわめて小差の態勢の違いで結局は確保のスタンスを崩したり態勢そのものを崩す失敗が多く、同時に、セルフビレイ用のピッケルが抜けてしまう率も高い。

この失敗例の多さを初心者の練度不足による未熟さだと片づけてしまえばそれまでだが、これらの確保練習は、おおむね、実際には確保を必要としない平板的な緩斜面で行なわれてきたもので、そのような場で、なおかつ、熟練と正確な判断力があって始めて成功するものである。

およそ、基礎技術といえば、登山のどの分野においても、その技術をそのままの形で使用する頻度が最も高いもので、その上、その動作が目的に対してもっとも効果的でなければならないと思う。であるとすれば、冬期登山の中級者に必要であるとする基礎技術の制動確保法で、この基本の態勢によるものが、非常に難しいうえに、また、

多くの登攀者の実用になっていないとすれば、何が原因であるというべきであろうか。

いうまでもなく、日本の冬山での登攀には、山の状況からいって確保の支点を他に得る機会が多い。そのような場合を除いても、氷雪上での確保例は岩壁取付点の下部や、雪稜登攀時などが多く、急斜面の広い雪壁上で行なう例は非常に少いと思う。

断定することはできないが、この点からみても図一に示された確保の態勢が用いられることは実際にはほとんどなく、図二（同テキスト一六八ページ・図二九）に示されたような、特に急斜面の氷壁上で、ピッケルのシャフトを利用した（それも、刺さればの話だが）制動確保は、少くともわが国の冬期登攀に用いられる確保法だとは思えないのである。

私に限っていえば、登攀中の実際に確保を必要とする場所では、この姿勢の確保は、ほぼ、適当でなかったか、または不可能であり、率直にいえば、危険性の高いものになる状況が多かったと思える。

これまで私の行なってきたものは、ピッケルの頭部にカラービナをセットし、それを支点にして、雪面につきさしたピッケルの上に腰をおろした腰確保か、同様にして頭部を膝でおさえこんでする肩確保でシャフトが途中までしか入らなかった場合はわずかな例であったが、それにセルフビレイをして腰確保を行なってきた。しかし、実際には、墜落を阻止した経験がない。

積極的に冬期登攀を行なっている数名に聴いた結果では、多くの場合、ピッケルを自己確保に用いて、同時にピッケルを支点にしたグリップビレイをするか、もしくは、直接的なボディービレイをすることが多く、不安定の上に、先頭者の墜落時に、それを止めることができるかどうか疑問だとしながら、止むを得ず行なっているという例が多くあった。

図一における確保の手順を簡単に挙げれば、①墜落の方向を想定する。②確保のスタンスを作る。③ピッケルを上部に刺し込み、セルフビレイをする。④確保態勢をとり、ザイル操作に入ることになるが、雪稜上や岩壁部での先頭者の墜落は、確保者への衝撃方向が予想とは全く違ったものになる傾向が強く、特に、確保者の後背部へ廻り込まれたら致命的な破綻をまねくこの種の確保では、登攀者の位置の移動に応じて確保スタンスや姿勢をかえなければならない場合が多い。この微妙な態勢で人体を最大傾斜線に平行に保つのは、実際には至難のわざであることがわかっていただけると思う。

私自身が現在行なっている確保は、おおむね図三で示したものである。これは、いわゆるクランポンビレイの方法を踏襲して、単に軟雪の多い日本の冬山むきに、確保支点としてピッケルを利用したに過ぎないが、図一と著しく異なるのは、確保の支点を自分の足下にとった間接確保法である点で、その最大の優利点は、先頭者の墜落方向に直接左右されない。いいかえれば、その衝撃は常に同一の、ボディービレイには最も有利といえる確保者自身の垂直方向にあることで、その安定性は、図一の態勢による確保とは比較にならないほど高いといえよう。

なお、体を最大傾斜線に位置する必要がないので、これを想定したり、対応態勢について考慮するわずらわしさはなく、スタンスは一ヵ所ですむ。極端な表現になるが、確保者が直立してピッケルを刺し込むことができる限りどのような場所でも確保が可能で、確保態勢をとる時間は非常に短くて済みあらゆる点で応用範囲が広く、確実性の高いものだと思っている。

図四をみておわかりの通り、ピッケルの頭部にカラービナを連結するか、スリングを利用してカラービナをかけたものへザイルを通すのが、操作上、ザイルの走る方向の変化に対応するには、後者の方がより容易である。

また、ピッケルのシャフトが完全に刺し込めぬほどの堅雪の場合にも、当然支点は雪面位置で行なうべきであるが図五のように山側位置にいま一つのカラービナを用い、スリングを雪面に押さえ込むと同時に、ピッケルが倒れて抜けてしまわないように利足をのせて加重するとよい。両足を揃えピッケルを挟み込むようにした体勢でスリング上にも体重をのせればより確実であるがまったく直立した姿勢を続けるのは苦痛になる時があることと、スリングを損傷させることもあるかと思われるので、私は図六のようなものを鉄棒で作成した。これは、中間部に利足をのせて体重をかけることができるような長さをとり、硬軟両様の雪質に使えるようにしたものである。

図一の方法で失敗を繰り返す初心者でも、この姿勢で行なう制動確保には非常に安定感をもち、制動操作にある程度失敗した場合でも、直立した肩確保によって体の弾性を十分利用できて強い衝撃にたえ、体がその上にのって正常な態勢をとっている限り、ビレイングピンであるピッケルが抜ける危険はきわめて少ないといえよう。

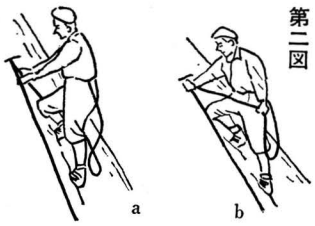
紙数の都合で説明が不十分であるが制動操作そのものに関しては従来の方法と全く変わらない。

ご検討の上、ご批判いただければ幸甚である。

なお、できるならば、またの機会に、いま一つの確保法について自説を述べてみたいと思っている。

急斜面における制動確保

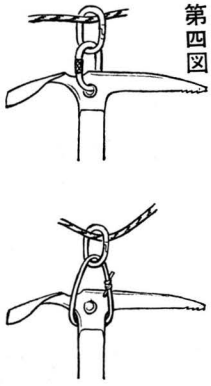
第二図



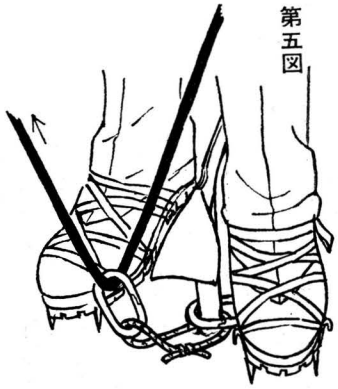
（登山指導者研修会テキストより引用）

第三図

（アクティブロープは脇の下から出すこと）



第四図



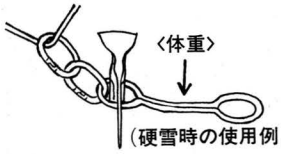
第五図

（A）直角にひねった型

（B）スプーン型

第六図

（軟雪時の使用例）



（硬雪時の使用例）

サラグラール西壁（一橋大写）

1971年のヒマラヤ カラコルム ヒンズー・クシュ

G 東部ヒンズー・クシュ（続）

三、静岡登攀クラブ

サラグラール西壁初登

隊員、秋山礼佑（隊長、36）、勝見幸雄（31）、永野敏夫（29）、山田修（31）、青島芳郎（25）、古川正博（27）、中地稔（24）。

登山活動、チトラル（74～6）、サルト峠、ロシュ・ゴルBC（四三六四m、710）、AC（五〇四〇m、715）C1（五二六四m、717）、C2（五五一四m、723）、岩壁の核心部を抜ける（725）、ビバーク1（六〇一四m、727）、ビバーク2（六六六四m 728）、岩壁帯、雪稜、雪原、雪峰（七一三四m、勝見、永野、山田、青島、729）、南西峰（七一八四mまたは七二五〇m、永野、同日）、BC全員（731）。

（注・サラグラールの西バットレス初登、HKにもそろそろ大規模なディレッティシマが始まろうとしている。それにしてもアルプスのどの山よりも高いところから始まる岩登り、そして二〇〇〇m以上の壁は素晴らしい。HKにも未踏の谷や山やバリエーションが数多く残されている。日本の登山家達の活躍が期待される所以である。

この登攀の詳報は「岩と雪」一二三号参照。

四、下関山岳会

ウドレン・ゾム南峰（～七〇〇〇m）

隊員、山下貞美（隊長、36）、松尾功（26）、市橋征夫（26）、三上勲（26）林桂彦（24）。

登山活動、ロワライ峠越えでチトラル（627、同発（71）、サルト峠（73）、ロシュ・ゴルBC（四一〇〇m 75）、ABC（五一〇〇m、714）C1（五三〇〇m、717）、C2（六〇〇〇m、720）、ウドレン南峰（～七〇〇〇m）登頂（松尾、市橋、三上、林、722）、山頂下五〇m位の位置でビバーク、723早朝（5 30頃）下山準備中三上隊員ウドレン氷河側に転落行方不明となる、捜索（724～82、発見し得ず）、BC撤収（81）本隊とズンドラングランで合流チトラル（84）。

× × ×

H ヒンズー・ラージ

一、雄山高校OB山岳会（富山）

ブニ・ゾム南峰初登他

隊員、佐伯裕孝（隊長、25）、椙田正（33）、木内敏則（22）。

登山活動、チトラル（58～11）、ラーマン（514）、クラクマリの滝の下BC（三七〇〇m、516）、滝登りは意外に容易、約四時間、下降用ザイル固定（517）、コラボート氷河にC1、C2（両方とも高度不明）を設置した後、次の各峰を登る、

ブニ南峰（六二二〇m、全員、初登、623）

〃佐伯、木内、二登、629）

ブニ北峰（六三三八m、佐伯、木内、71、二登）

エクタ・ゾムII（五九五四m、佐伯、木内、73、初登）

コラボート・ゾム（五八五〇m、佐伯、木内、74、二登）

次にBCへ引返し、南にある五九〇六m（ブリ・ゾムと命名）に初登、78、佐伯、木内）、チトラル着（629）。

（注・この隊は日本国内での正式手続きなく、問題を起こした。あとのスワロー会の人達には気の毒な結果になった。

二、スワロー会

ブニ南峰他

隊員、中村雅人（隊長、25）、中村博之（26）、高橋和志（25）、清水孝司（22）

登山活動、チトラル、ブニ、マスツージ、ラーマン、滝を登り、コラボート氷河上にC1、ブニ北峰と主峰の間から主峰を狙ったが、四〇〇mの雪壁に阻まれ失敗、パノラマ峰（五六九〇m、全員、923）、ブニ南峰（ビバーク一度して高橋、清水、第三登、929）、C1撤収（928）。

三、早稲田大学山の会

ツイI峰（六六六〇m）試登

隊員、北岡次郎（隊長）、豊田紳二（21）、須田義博（21）、西山一夫（21）。

登山活動、チトラル（88）、ブニ（810～11）、マスツージ（813）、ラシュト・イチュブン（819）、BC（四〇〇〇m、コタールカシュ氷河、820）、C1（四四〇〇m、822）、C2（四七〇〇m、829）、C3（五三〇〇m、92）、C4（北稜下、五六〇〇m、96）、一度BCに戻る（99）、C1、C2、C3（915）、アタック（916）、最高到達点）五九〇〇m、919）、C3より再攻（921）、六二〇〇mに達す（925）、BC経由イチュブン（927）帰途につく（929）。

（注・ツイIは現地ではチャティール・ゾムと呼んでいるらしいが、これはかなり新らしい名称とのこと）

四、名古屋工業大学

ブニ・ゾム周辺

現地でこの隊に会っている人はだいぶいるが、記録未入手。

I スワット

一、東神戸高校山岳会

チトラルよりスワットへハランビット（六〇三一m）試登

隊員、山内敦人（隊長、39）、青木稔（25）、中本憲一（24）、吉田良正（22）田中俊甫（32）、寺光克彦（25）、小林秀昭（22）。

登山活動、横浜よりハバロフスク経由ラワルピンディ（722）、チトラル（727）、マスツージ、ラーマン、ソール・ラスプール（83）、カチカニ谷徒渉失敗三回（84、5）、ラスプール（86）、ポーター頭とポーターを代える、カチカニ徒渉成功（88）マナリ、タロー出合BC（三三〇〇m、810）、タロー谷でオーストリア隊に会い、ハランビット登頂を知る（813）、同峰偵察（820）、登頂失敗（822）、タロー峠越え（829）、バンディ峠越え（831）、ガブラル（91）、ピンディ（93）。

（注・スワットへ入ったのはこの他にも名城大隊と京都城南隊があるので計三隊となる。）

× × ×

以上で一九七一年のヒマラヤ、カラコルム、ヒンズー・クシュの部分を終る。余り充分ではないが、いくら連絡しても返事の来ないのもあるので止むを得ない。

次号からはそろそろ七二年のプレ隊の報告をしなければならないが、それと同時にN・Zやアンデスでの立派な活動もお知らせしたい。なかなか忙しいことである。

外国でも日本の海外登山隊の多いのにはびっくりしているが、数の割には立派な成果をあげてない隊が多いのはどういう理由であるのか。外国の隊の中にも要領がよくて、日本隊のフィクスを利用してシャーシャーと初登をしてくるのもあるが、日本隊の失敗のあとを綺麗に自力で登ってくるのもある。まあ功罪相半ばというところであるが、日本の側でももっと研究すべきことが沢山あるのではないであろうか。

外国隊から、虱や南京虫の意味もあるクラミング・インセクトなんて言われないような、立派な登山をやってきて貰いたいものである。（吉沢一郎）

高所登山技術考〈1〉

村井　葵

私は、私の経験を通して、医者ではない登山者の立場から、一度じっくりと高所登山の戦術を考えてみなければいけないと常々考えていた。このたび編集者からの強い要望で思いきって「高所登山技術」に関する「防禦」の面から私的な考えをまとめてみようと覚悟した。最近ヒマラヤでは妙な事故が起りすぎているし、これから高所登山を試みようとしている若い人たちのためにそう思い立ったのであった。

昨年発足した当会の「高所登山技術研究会」の席上で、藤井運平さんがその必要性を説かれ、金坂一郎さんが「我々は山でわけのわからない、くだらない死に方だけはしたくないものだ」と発会の言葉の中で述べられた。過去に高度障害に打ちとられた前科者の私としては、正直いって赤面を禁じ得ない言葉としてそれを受けとめた。

六五年のローツェ・シャールから帰って以来、私は登山者の側から真剣に「自己管理技術」を考えなければならないと痛感している。

デリケートな難所を通過するとき、自分の身につけた登山技術をたよる以外に方法がないのと同じように、高所登山ではかなりしっかりした「自己管理技術」が要求される。無知では喜びが得られないばかりか、破滅してしまうこともあり得るのである。

自分の身体のこと、高所医学のことは隊付のドクターに任せておけばよいという他力本願な甘えは苛酷さが要求される高所登山では通用しないということである。その証拠に私自身がドクターのいるテントで倒れたし、エベレスト本隊の成田隊員は二人のドクターに看病されながら絶命していった。自分の身体をコントロールする術は、自分の身についた知恵を最大限に活用する以外に方法はないのである。もっと極端にいえば、同じ環境で生活するドクターだってコンディションを崩せば倒れることがあり得るし、同じ人間なのだから死ぬことだって考えられる。これまでの登山隊で、ドクターの遭難するケースが少ないのは、高所医学の知識が他の隊員より豊富だからといえるのではなかろうか。

そう考えると高所登山を試みようとする者は、低圧環境下で人体が受けるさまざまな障害をよく知り、また人体のウィーク・ポイントをマークし、高所での動き方を充分に認識し、それを実際の登山の場において活用しなければいけないといえる。

アメリカスポーツダイビング協議会の教書を見ると、〈潜水医学〉の項に次のような文章があるので引用してみたい。

「環境や身体の活動自体が、身体にどのように影響を及ぼすか、その影響に対して身体がどのように反応するかということは、ダイバーが水中でどれだけのことができるかを決定することだし、またダイバーに障害を与える多くのことがらにも関係があることだ。これらは医学的なことにはちがいないが、医者だけにまかせておいてよいということではない。実際、効果的で安全な潜水をしようと思う人は、これらに関する特殊な医学的な事項について普通の陸の上のお医者さんよりも多くのことを知っていなければならないのだ。こういう医学知識はちょっと難しいことかも知れないが、潜水では無知では喜びは得られないのだ」

低圧環境でも高圧環境でも人体が障害を受け、滅びる条件は酷似しているといえる。そういう意味で前述の文章は高所登山の実践でもそのままあてはめて考えることができるのである。

「潜水」を「高所登山」、「水中」を「高所」、「ダイバー」を「登山者」に入れかえて改めて読み直してみると、高所登山を試みる者にこれからの考え方を示唆しているのである。

高所医学については、専門家による学問的な整理も大切な問題であろう。これから高所に向かおうとしている登山者に貢献すること大と考えられるがそれと自己管理技術はまた別の問題のような気がする。

学問は学問にすぎず実践ではないのだから実際に高所に飛びこんでいく登山者の立場から考えるならば、生命維持や頂上をかちとるタクティックスを組むためには自らの英智を養ってそれに処する以外に方法はないのである。

私自身の屈辱的な経験を述べるならば、それは一九六五年、ローツェ・シャールの西南稜上に舞台は戻るのである。私たちはイムジャの谷をつめて五三五〇mの高さにベース・キャンプを張った。その頃私はポーターが運び上げたかなり悪性のインフルエンザに感染して、四十度を越える高熱にフラフラになっていた。私が休んでいる間に身体の調整をうまく保ち、高度順化した仲間は氷壁になって続いている西南稜上にルートを切り開いていた。復調した私は一度第二キャンプ（六三〇〇m）を往復しただけで、その後はどんどん氷稜を登りつめていった。これは大きな間違いだったのだが、三年前のアンデスの体験から私は高所に強いはずの人間だと常に自認していた。ちょうど私が七千mを越える第四キャンプに登りついたその日に、仲間の一人が岩板の上に積った風成雪に足をすくわれて氷のルンゼに落ちていった。その夜傷つき意識を失った仲間と私の二人は、ルンゼの中央部に穴を掘ってビバークした。分刻みで小さな雪崩が襲い続けていた。その後、寝具も、防寒衣もない、食事や水分の補給もろくにできない救助作業が十日以上続いた。

六三五〇mの第二キャンプにおりると全く天国に思えた。私は十六日ぶりにのんびりとくつろいでいた。痩せこけてはいたが、身体のコンディションもそう悪いとは思えなかったし、気力も充実していた。ヤクの天井が美味く、ドンブリで二杯も平らげるほどであった。身体は完全に低圧条件に順化していると自認できるほどであった。それに高いところから低所に降りたのだから二、三日休養すればもっと調子が整うだろうと軽く考えていた。ゆっくり休養してそれから頂上だという新たなファイトも湧き起ってきた。

そんな日の夜、私は書きものをしていた。頭は冴えず、筆足をかせげずいらいらしながらも真夜半まで耐えた。小用を足して就寝するつもりで立ち上がろうとした。脳に衝撃があって私の身体が暗国の世界に沈んでいくのを覚えながら、私は意識不明に陥った。自覚症状もなく、何の前ぶれもなくこつ然と私は倒れてしまったのである。

私が目覚めたのは一ヵ月後の帰りのキャラバンに入ってからだった。一ヵ月の間、私の頭脳の機械は完全に正常な働きをなくしていた。私は目覚めたとき、まず周囲の状況に慌て、戸惑っていた。なぜなら昨夜眠りについて今朝眼が覚めたという感覚で意識を取り戻したからであった。

酸素の稀薄な雪の中のテントで眠りについたはずなのに、目覚めた私はポーターの担ぐバスケットに軽々と乗せられている。私は不思議でならなかった。事実を理解するために随分長い時間を必要とした。一ヵ月の空白はそう簡単に埋めるわけにはいかなかったのである。

図書紹介

スキーヤーのための雪の科学

黒岩大助著

本書は、長年月にわたって雪の研究を行なってきた科学者によって書かれた「雪の科学」に関する一般教養書である。

専門分野の科学者が、一般向けに書く教養書は、周知の問題を、学問的、理論的な視野から定義づけ解説を加えるというのがこれまでの一般的な傾向であった。本書は、そうした面ばかりでなく、スキーヤーや冬山登山を試みる人、雪に興味を持つ人に、雪の結晶や積雪、なだれの基本的概念を正しく教えてくれる。

過去において、雪の結晶や積雪やなだれが、多くの登山家（登山者）、スキーヤー、科学者、文筆家などによって、それらのひとびとの経験や研究を通じて語られ、各方面に発表された例は数多く見られるが、本書のように長年月にわたって、雪を科学的に研究を行なってきた科学者が、一般向けに、自己の研究成果を、わかりやすい「雪の科学」として、体系づけて一般教養書として発表した例は、日本ではめずらしい。

日本における雪の研究の歴史的変遷とくにわが国の雪の研究が、雪の結晶の観察から始められて来たことを述べ本書で雪の科学を論ずるための中核となっている「雪の焼結」理論を主軸に雪の結晶や積雪の基本的概念、なだれ現象、スキーと雪の関係等について、十六項目にわたってリズミカルな構成を展開している。また、「雪の学問はまだ若く、ちゃんと体系づけられていな

い」と前置きして、自己の研究「雪の焼結に関する研究」（一九六七年・日本雪氷学会賞受賞）の理論を中核に「雪の科学」を体系づけつつ読者が容易に理触できるように配慮している。

一方、著者自身の体系づけで不備な面や説明の不充分な部分については、その方面の著書を紹介している。これは読者への親切な心づかいであるが、一般向け解説書にはあまり例のないことであって、著者自身の長年月にわたる研究に対する姿勢がうかがわれる。

著者は、本書のあとがきで、「この本はまず粉体としての雪の性質から出発して、雪がなぜくっつくかということを『焼結』ということばでおきかえ、それをしんにして雪の性質を物語ってきた」と述べているように、本書の理解を容易にするためのポイントを指摘している。また、焼結によって、雪が強固な結合体となってゆくところから雪の性質について述べ、この考えを本書の根本としている。

雪の性質については、各項目にさまざまな実験や実例を挙げ、新鮮な興味を与えてくれる。たとえば雪の安息角について炭鉱地帯の壮大な円錐形のボタ山を例に挙げ、ボタ山の斜面が水平となす角度（鋭角）が、ボタ山の安息角であり、安息角は粉体粒子相互の摩擦を表わすものであると説明している。また、雪の安息角測定については、雪の粒と粒との間に働く「付着力」、粒子表面の「粗度」、周辺あるいは雪の「温度」等の条件から考察を加えた実験例を挙げて述べている。このようなことをスキーヤーや登山者が知っていればなだれの危険を避ける判断を、より適確に行ないうるだろう。

筆者は、雪に関係する職場に勤務しているが、一登山者の立場で本書の内容に接してみて、随所に使われている専門的な用語や学術語、理論式等のため、最初はかなり難しいという印象を受けたが、前述のごとくテーマの構成や解説の方法が、一般向けに配慮されていることから、雪の科学に関する専門書、教科書、実用書というイメージはない。むしろ雪の科学に関する優れた教養書として利用されるべき書物であろう。

最近では、登山技術、登山案内、山の気象学等についての立派な書物は沢山ある。しかし、雪についての書物はわれわれ登山者が探しても、手近に親しめる本を見つけ出すことは不可能に近かった。とりわけ本書のように、著者自身の体系づけとはいえ、一貫して雪に関する知識の得られる本は、その出版を期待するのみであったといえるだろう。

著者は、雪との出合いを、まえがきの冒頭で、「私は雪がめったに降らない南国土佐に生まれた。北海道大学低温科学研究所で、助手として働くため札幌にやって来た昭和十八年の冬、生まれて初めてスキーをはいた。」と述べている。それいらい、今日にいたるまで雪の研究を続けてこられ、現在も北海道大学低温科学研究所で、教授として後続研究者の指導に当っている一方、現在ＩＡＨＳ（国際水文学協会）の下部機関ＩＣＳＩ（国際雪氷委員会）の日本における連絡員を担当している。職務上、国内の雪や氷の研究に関する文献はもとより、海外の雪や氷の研究に関する文献や研究情報にいたるまで掌握され、この方面の知識については第一人者である。こういう人が雪について、本書のような一貫した『雪の科学』を出版してくれたことはありがたいことである。

一方、本書を出版した目的について著者は、本書のあとがきの冒頭で「スキーおよび冬山を愛する人たちに、少しでも『雪の科学』について興味をもっていただけたらという希望をもって書かれたものである」と述べている。これが目的であるなら、雪の科学を読者に理解させると同時に、スキーヤーや登山者がすでに経験していることがらにもふれるべきであったろう。とくに後半のなだれに関する項目に、本書を手にする読者が期待を持つことはあきらかであるから、たとえばなだれの危険を予知するこれまでの経験的な知識について、科学的な立場から問題点を説明してほしかった。この点については今後の出版物に期待するとしてもスキーや冬山登山を行なう一人として本書が出版されたことに感謝したい。

（五十嵐高志）

昭和四十七年一月発行
Ｂ六判　定価五〇〇円

雪の高森山

名児耶達男

高森山、と山名をあげてもどこの山か知っておられる人は少ないのではないかと思う。たかだか一一〇〇ｍの山だが、まずハイカーの訪れることのない、いうなれば僻地の不遇な山である。

去る正月には雪が多くてとても無理だろうという宿の主人の言葉で予定を変更し、積雪の早坂峠を越えて太郎布の部落に下り、沼沢湖に出て帰ったが去る三月十八日に休みがとれたので現地へ電話した所雪はないとの宿の主婦の言葉だったので、再び高森山を目指して奥只見の会津川口に向かった。

しかし車窓から見るとなるほど国道二七五号は雪はないが、視野に入る沿線の田畑や山々はまだまだ残雪が多く見られ、須原の駅ではスキーヤーが大分下車したほどだった。

玉梨の部落は残雪がまだらにある程度だったが、国道をはずれて高森山への登路にかかると、前回の早坂峠越えの時と同じく足跡の全くない雪路になってしまった。上野原の牧場までは迷うことなく行きついたが、だだっぴろい白一色に塗りつぶされた、小さな起伏の連なる牧場からまるっきり路はわからなくなってしまった。

コンパスと地図でおよその見当をつけて歩き、小高い丘の上に登り高森山の山容を見つけたが、登路は全然不明だった。右手東南は長い尾根が山頂から続いている様子なので、北に方向を変えて小さな沢に降り、再び雪の台地に登り暫く高森山の方向へ向かったが、どこまでいって取りついてよいのか見当がつかないし、高森山の手前にちょっとした尾根が右側に張り出しており、それを廻りこむのも大変だと思われるので、意を決して山頂より二つほど西よりの（手前になる）ピークに登ることにして左手に下りてきている小尾根にとりつくことにした。

もちろん正規のルートではないので灌木の中をくぐり抜けて雪に足をとられながらの直登となった。

昨日まで天候ははっきりしなかったというが、今日は幸い快晴で空はぬける程青く風も全然ない。しかし雪量はしだいに多くなり気温も相当さがっているらしく、キルティングを着ていても汗ばまない。雪中の登りは案外きつく稜線は眼の前に見えているがなかなか近づかない。輪樏を持参しなかったので、宿で借りてこなかったのが悔やまれる。

急斜面の喘登が漸く終るとちょっとした小平地に出てその少し先の斜面をわずか登った所が高森山へ続く稜線とわかった。ますます深くなる積雪に悩まされながら最後の急登を終ると、北面が逆落しに落ちこんでいる稜線に飛び出した。

枯れた大木が一本だけ立っているこの稜線上でまず一服つける。すぐ左手（西側）は雪がまだらについている岩稜で、先程小尾根にとりつくとき、何となく小沢をへだてて左手の尾根へ心ひかれたが、何か変な予感がしてそちらにいかなかった。もしとりついていたら、あるいはこの岩稜上で苦しんだかも知れない。

眼下には曾遊の沼沢湖が、白一色の中に静まりかえっている。右手（東側）は目指す高森山への稜線だが、これという樹木もなく見通しはよい。

一服終って高森山へ向かったが、やせ尾根に雪庇が張り出しているので、軽装備の単独行ではいささか緊張させられたが、なるべく南面を絡みながらまもなく待望の山頂に着いた。

疎林の山頂の展望はまずまずだった。見渡す限り名も知れぬ山波が連なっているが、西方にやや離れて、蒼穹の中に他の山々を圧して、純白の山容を屹立させている御神楽岳の姿が、素晴しく印象的だった。

しいんと静まりかえった山頂。雪に悩まされながらの登頂だったが、それだけにやはり登ってよかったとしみじみ思った。無風の山頂で少しのんびりしたかったが、雪中なのでじっとしていると雪解けでびしょぬれの靴下で足が冷い。

周囲を眺め一服終って下山にかかった。帰りは登路を辿ったが、午後の雪はますますくさっているため、牧場へ降りるまではときどき太腿までもぐってしまうほどだった。牧場へ出てからはさすがにそれほどのことはないが、雪原の歩行は午前に比べてやはり歩き辛かった。顔は雪の照り返しで、俗にいう金時の火事見舞で真赤に雪焼けしてしまったが、思ったより早く宿へ帰って温泉にひたった時は、さすがにやれやれとくつろいだ気分になった。

武田久吉博士のことども

藤島敏男

五月二十一日、九段坂近くへ所用あって出向いた折、ふと思い立って武田博士のお宅を訪れた。あいにく留守、お嬢さん運転の車で埼玉の方へ、撮影に出かけられたとのことであった。この一両年来足腰が大分弱られたように見受けられたが、記憶力などは聊かも衰えが感じられず、年少の私の方がタジタジとするほどであった。

その日も撮影の目的が、どこかの植木市か夏の祭礼かそれとも路傍の石仏か、それまでは夫人から伺わなかったが、ともかく何かはっきりした目的物の撮影とあれば、博士の健在ぶりが窺われて、私はいずれその内、縦横無尽の快談拝聴をたのしみにといって辞去したことだった。

それから五、六日たって、博士が私の往訪の翌日(二十二日)、外出仕度の最中、室内で倒れられ半身麻痺、脳血栓らしいとの報が伝えられた。ご本人やご家族の意向であろう、一切他言無用といわれていたので、博士の再起を祈りながらも、お年がお年だからと一沫の不安を抱いて、一切を私の胸に秘めておいた。六月一日お宅にほど近い逓信病院に入院、万全の加養をつくされたがついに七日夜九時十八分、武田博士は九十年の長い生涯を閉じられたのである。

われわれの日本山岳会が明治三十八年(一九〇五年)発足したときの創立発起人七人の中で、六年前山川黙氏の没後唯ひとりの生存者であり、名実ともに本会の最長老であった。日本山岳会は今年が創立六十七年目である。その年まで創立当初の発起人が健在であったということは、考えてみるとなんでもないようだが、実はたいへんなことである。ほかに例を求めても恐らく容易に見当るまい。

アルパイン・クラブというお手本があり、ウエストン師の慫慂があったとはいえ日本に始めての「山岳会」を作ろうと旗上げをした発起人、七人の侍は城数馬、小島烏水の両先輩以外みな二十代の若武者であった。武田さんは当時二十三歳、爾来六十七年の星霜移り変って本年九十歳ということになる。

「登山と植物」という著書がしめすように、このふたつが博士の生涯に最も大きな比重を占めることはいうまでもあるまい。植物の研究はもちろんだが、登山の実践でも、ごく晩年の二、三年は別として、本当に長く息のつづいた山のぼりであった。おそらくあとにも先きにも武田さんのような登山者はないであろう。

長身痩躯、山のぼりに適したからだつきでもあったが、健康保持には細心の注意をされていたし、若いときから「自分のしたいこと気の向くことだけをして、イヤなことは一切おことわり、言いたいことは遠慮なく言って発散、会いたくない人間には会わない」といった姿勢は、健康をそこねないために大切なことだが、武田さんにもそういった姿勢が多分にあって、それがまたいつまでも壮健であったゆえんであろう。こう書いても私は武田さんから叱られるとはおもわない。「君それは当り前のことじゃないか」と一笑されるだけであろう。

武田さんには学者として何事によらず綿密正確でなければならぬ、些細なことでも誤謬や不正確なのは看過できないという一面があった。これもまた当然のことであるが、ある場合にはその舌鋒筆鋒のするどさにわれわれが茫然とするようなこともあった。しかしそれも正確を期するためとあっては、太刀打ちができなかった。

近年では一昨四十五年三月第六回秩父宮記念学術賞を受けられたとき博士の感激と喜びがひとかたならぬものであったこと、昨四十六年六月東京小石川六義園での有志の集りに初めて出席されたこと、本年も出席して席上「昨夏桧枝岐からヘリコプターで久恋の平ケ岳頂上に至り、山上湿原の植物調査をした」話をするとて、その原稿までできあがっていたこと、など。

また私個人としては大正七年(一九一八年)以来武田さんから精神的にシゴカレッぱなしというわけだから、思い出話を書き出したらきりがない。

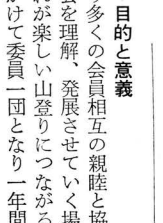
日本山岳会としては創立発起人の最後のおひとりが亡くなって、いまやお目付役なしと気をゆるすべきではないとおもう。あの歯切れのいい武田さんの話は、もう再びきくことができなくなったのを、寂しくおもうのは私だけであろうか。

(一九七二・六・十一記)

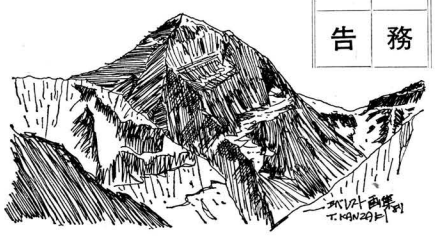
〈追記〉会報二九九号、三〇〇号に学術賞授賞についての記事がある。参照されることを望む。

〔付記〕武田博士は本会発起人の一人であり(会員番号五番、昭和十年に名誉会員に推薦され、二十三年から二十六年まで本会会長をつとめられました。高山植物研究の権威として、近年特に自然保護に力を入れておられました。謹んで御冥福を祈り上げます。

(編者)



会務報告



神崎忠男画

第二八四回小集会のお知らせ

▽日時　七月二十日(木)　午後六時半
▽場所　本会ルーム
▽講演　〝山賊〟山男を襲う
▽講師　菊池修身氏(拓殖大学ヒンズークシュヒマラヤ遠征隊)

ビール・パーティー

▽日時　七月二十二日(土)　午後四時
▽場所　本会ルーム
▽会費　ビール券五百円、ジュース券三百円
(婦人懇談会)

集会

▽目的と意義
より多くの会員相互の親睦と協調、山岳会を理解、発展させていく場とし、それが楽しい山登りにつながることを目がけて委員一団となり一年間頑張る

▽お願い
担当理事神崎他十一名の委員は皆若手ばかりですので会員の皆様の御指導のほどよろしくお願いすると同時に、集会係の集会でなく会員の集会であることを理解いただき会員皆様による集会の盛上がりを切望いたします。

▽集会
毎月二十日(昨年度は十五日)を定例集会日とし、その集会の内容は事前に「山」に記載いたしますので留意され多数ご出席下さい。ほかに必要に応じて事前連絡の上特別集会開催を予定

▽講演、講義
講演、講義などしたい方、ご希望の講演、講義など、また集会関係の資料などもどしどし提供いただきたい。

—年間計画(予定)—

▽定例集会(毎月二十日)
七月(木)　〝山賊〟山男を襲う、拓大アフガニスタン遠征の記録
八月(日)　現地小集会(前夜集合)
九月(水)　映画会
十月(金)　パネル・ディスカッション
十月二十三日(日)　集中登山
十一月(月)　山の展覧会(写真　絵詩)
十二月(水)　忘年会
一月十四日、十五日　スキー懇親会

▽特別集会
スケッチ教室、星座教室、雪崩研究会、医療教室、高所登山技術研究会、ソフトボール大会、釣大会など。(神崎)

海外連絡委員会

UIAA(国際山岳連盟)の総会(第四十回、八月二九日〜九月三日、スイス・モントルー)に本会から理事神原達と評議員佐藤テルの両名を派遣することにし(ただし参加費のみ本会負担)主催団体であるスイス山岳会あてにそ

の旨通知した。

フランス国立スキー・登山学校（シャモニー）から恒例の夏季学校のスケジュールを知らせてきたが、海外連絡委で検討の結果、今回の対象がヨーロッパ周辺の国々の登山者であるため、今年は取り止めた。

お願い!!

本会の本年度事業のひとつとして「日本アルプス英文紹介書」の編集・刊行があります。国外からの日本の山々の登山案内の問合せは当会に毎月数通きますが、紹介すべきよい資料、書物がなく海外連絡委員会ではその必要性を痛感しています。どなたか日本アルプスを外国人に判りやすくかつ正しく紹介したいという編集希望者はおられませんか。今年はタイプ印刷の予算しかありませんが、将来は立派なかつ権威ある本にしたいと思いますので、そのための核となるものをまとめたいと思います。希望者は御連絡下さい。

（神原　達）

支部だより

◇**関西支部役員**　（支部長）今西寿雄（委員）大賀寿二、阿部和行、住吉仙也、野村哲也、宗実慶子、松浦輝夫、桑田結、金井健二、白石裕、林茂、清原鉄也、常慶和久、久野英一郎、竹尾宗和、川田哲二、神山義明、（監事）二木信次、水野政博、（支部評議員）中原繁之助、山口季次郎、田中薫、小島栄、直木重一郎、加納一郎、粟飯原健三、二木信次、四谷竜胤、津田周二、今西錦司、水野祥太郎、中村勝郎、児島勘次、浅井東一、富田健一、橋真琴、篠田軍治、田中栄蔵、仲西政一郎、武内重雄、桑原武夫（四月三日付）

◇**秋田支部役員**　（支部長）柴田均二（委員）高田俊雄、佐藤兼治、佐々木民秀、岡田光行、中川広三郎、（監事）福田文二、保坂隆司（四月七日付）

本年度事業として、六月の現地小集会、現地支部長会議協賛の他、十一月十三、十四日、田沢湖高原、秋田経済大学研修会館で親ぼく登山を行なう。

第十五回有志閑談会

六月十日（土）恒例の閑談会は、快晴の日を迎え、六義園で開催された。山の手線事故にも拘らず、出席通知四十六枚、出席者四十三名の盛会。冒頭三田会長から武田先生逝去の報告ありついで本来先生じきじきのお話がある予定だった「平ケ岳瞥見記」を近藤信行氏が朗読して追悼の意を表した。なお当日病気欠席の足立源一郎、神谷恭、田部重治、槇有恒、松方三郎の五氏にお見舞の寄書をした。一同歓を尽して定刻八時散会。次回の世話人は須田紀子、近藤信行、坂下心一の三氏に決定した。

新旧役員懇親会　六月二十日夜、三田会長以下十六人がブリガンドに参集旧役員の労をねぎらい記念品として会員番号入りペーパーナイフを贈呈、古い山旅の話がはずんだ。

（板倉勝正）

図書室便り

（昭47・5）

新刊図書受入報告

えぞ山岳会寄贈

(1)えぞ山岳会編『消えさりゆく後姿を追い求めて』　昭和47

青娥書房寄贈

(1)串田孫一著『野兎の目』　昭和47

あかね書房寄贈

(1)薬師義美著『神々の白い峰―グルジャ・ヒマール登頂記』　昭和47

東京新聞社寄贈

(1)小森康行著『日本の岩場―第2版―』　昭和47

日本放送出版協会寄贈

(1)川崎隆章著『安全登山学への道』　昭和47

成美堂出版寄贈

(1)生沢朗著『氷壁画集』　昭和47

笠原潤二郎氏寄贈

(1)井上幸三著『須川長之助物語』　昭和46

丹部節雄氏寄贈

(1)山田二郎著『登頂ヒマルチュリ』　昭和36

日本山岳会

(1)日本山岳会編『山岳―第1年第1号（覆刻版）―』

(2)日本山岳会編『山岳―第1年第2号（覆刻版）―』

(3)毎日新聞社編『マナスル―'54～'56―』　昭和33

定期刊行物受入報告

〔部報・会報類〕

(1)全日本学生山岳連盟『学連』No. 1（47―4）

(2)北海道自然保護協会『北海道自然保護協会会誌』　No. 10（47）

(3)兵庫山岳連盟『兵庫山岳』No. 60（47―5）

(4)全国自然保護連合『JUNC』No. 1（47―3）

(5)長野営林局『国観協会報』　No. 1（47―3）

(6)林野庁『国有林』　No. 1（47―4）

(7)国立公園協会『国立公園』No. 270（47―5）

(8)京都山岳会『京都山岳』　No. 565（47―5）

(9)低い山を歩く会『低山』　No. 83（47―5）

(10)日本山岳協会『登山月報』　No. 38（47―5）

(11)日本登山協会『山と雪』　No. 169（47―5）

(12)日本登山学校『雪と岩』　No. 26（47―4）

〔雑誌〕

(1)『アルプ』　No. 172（47―5）

(2)『岳人』　No. 300（47―6）

(3)『岩と雪』No.25 (47-5)
(4)『山と渓谷』No.405(47-6)
(5)『創文』No.108 (47-5)

〔その他〕

(1)国鉄山岳連盟『ニュージーランド・アルプス親善登山隊報告'72』
(2)日本ネパール文化協会『ネパール語研究文献』
(3)山崎安治氏寄贈『早稲田大学山岳部ダウラ・ヒマール登山隊報告書'70』

〔新着海外雑誌〕

1. "Alpinismus" 1972-1, 2, 3, 4.
2. "Appalachia bulletin" Vol. 38, No. 5, Apr. '72.
3. "Der Bergsteiger" 39 Jah, Apr. '72.
4. "Deutscher Alpenverein" 24 Jah, Heft. 2, März /Apr. '72.
5. "La Montana" No. 15, Dec. '72.
6. "Österreichischexr Alpenzeitung" Jah. 89, Folge. 138, Jän/Feb. '72.
7. "Rivista mensile" Anno. 92, No. 2, Feb. '72.
8. "U. I. A. A." No. 48, Feb. '72.

〔洋書受入報告〕

Arnold Gubler 氏寄贈
1. Caduff, Christian "Alpine Skitouren" Verag Schweizer Alpen Club. 1962.

佐藤テル氏寄贈
1. Kronbauer, A.M. "The International Standard Atlas of the World" Consoludeted Book Pub. 1959.

ルーム日誌（47年5月）

9日（火）自然保護委員会
11日（木）青年懇談会
12日（金）理事評議員会
13日（土）全日本学生山岳連盟
17日（水）婦人懇談会
19日（金）常務理事会
22日（月）学生部委員会
24日（水）書評委員会
25日（木）青年懇談会
26日（金）会報編集委員会
29日（月）海外連絡委員会
30日（火）図書委員会
五月中来室者　四四二名

会員異動

終身会員

一二二七　島田　巽

改姓

七一四〇　島　汀子　旧姓村山

退会会員

四三六三　斎藤賢二

物故会員

七二一八　安井　忠　昭和四七・五・三逝去
七三三〇　井本貴子　昭和四七・五・一五逝去

会員名簿訂正

二六頁上一三行へ挿入　加藤正己　六八九六　七〇・一　〒一四四　大田区南雪ケ谷二―一一―一六　三井銀行雪ケ谷寮　（〇三）七二九―五〇二一
三〇頁下一二行一三六九　電話　（〇五九二）二八―二三四七
七八頁下一〇行一九四一入会年月　四一・七　電話　（〇四六七）八二―三六九〇

『山岳』第一年第二号覆刻版

在庫約五十冊を残すだけとなりましたので、希望者は至急ルームへ。

クラブ・タイ新発売！

クラブ・タイが発売されました。アングリー・レッド、ワイン・レッド、フレッシュ・ブルー、他にアスコット・タイ（アングリー・レッド）の四種をとりそろえ、値段はいずれも二千五百円です。伝統的な英国調のネクタイで会員章がクラシックに配列され格調が高い……とは、もっぱらの評判です。お申し込みは事務局へ。

あとがき　会報編集委員は、田中栄蔵、近藤信行、春田俊郎、板倉勝正、小方全弘、大倉昌身、村井葵、岸栄、今成征三、宮代良治のメンバーでスタートいたしました。会員諸氏の積極的な寄稿を期待します。

武田久吉名誉会員のご逝去に際し、会員各位から寄せられたご好意に編集委一同深く感謝いたしております。

なお、都合上、六月理事評議員会議事録、本年度各委員会名簿（一部未着）図書委員会報告、土橋進一氏寄稿の「平ヶ岳山頂附近・裏燧御池附近の湿原植物等の目録」、川崎精雄氏執筆の図書紹介『鶴の舞』が次号送りとなりました。（坂下）

訂正　会報「山」第三二四号三田会長あいさつ（要旨）中、「木津清一」は「木津誠一」につき、つつしんで訂正、お詫びいたします。

昭和四十七年七月十日発行
東京都千代田区神田錦町三―二三　向井ビル
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　坂下心一
（293）七四四一
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

ブータン感傷旅行
小方全弘著
〈菊判280頁〉定価980円

森林・草原・氷河
加藤泰安著
〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話
初見一雄著
〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山
望月達夫著
〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に
大島堅造著
〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山
川崎精雄著
〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと
坂本直行著
〈B5判206頁〉定価2,800円

シプトンの自叙伝
未踏の山河
大賀二郎・倉知敬訳
〈A5判440頁〉定価1,900円

山日記1972年版
日本山岳会編
〈A6判368頁〉定価750円

山岳
日本山岳会編
〈A5判〉
総索引 1,000円
65年 2,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
61年 1,800円

国立公園カレンダー
国立公園協会編
〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然
赤星 昌編
〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集
戸野昭・朝倉宏編
〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

日高山脈
北大山の会編
〈菊判362判頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ
藤島敏男著
〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅
足立源一郎スケッチ帖
〈A変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記
京都大学学士山岳会編
〈A12取変型判170頁〉定価1,200円

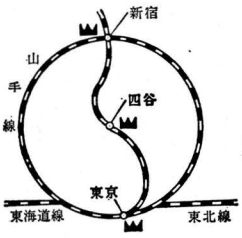
登頂ゴジュンバ・カン
高橋 進編
〈A5判350頁〉定価900円

キンヤンキッシュ1965
東京大学カラコルム遠征隊編
〈B5変型判220頁〉定価3,000円

登山・スキー用具専門店
山の店
大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買い易い 山の店
●北へ来たら 山の店
●フレッシュな 山の店

山とスキーの専門店
片桐
東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店

山友社 たかはし

登山とスキー具
イワタ
東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718

登山用具の専門店
好日山荘
東京店・中央区銀座2－4－5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2－4－4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933(代)
福岡店・須崎町1－4 (28) 3440